

## 【資料紹介】

# 胎土からみる九頭神廃寺出土瓦

## — 関西大学博物館所蔵資料の紹介 —

中 東 洋 行

### 一. はじめに

関西大学博物館が所蔵する資料の中に、大阪府枚方市所在の九頭神廃寺で採集された二点の軒丸瓦がある。これは、関西大学の卒業生である大門博氏が枚方市牧野本町二丁目にて採集し、関西大学博物館へ寄贈されたものである。同資料は関西大学博物館の第二展示室にて陳列されたことがあり、その際には藤井寺市教育委員会上田睦氏による観察結果がパネルにて紹介されている。

これらの軒丸瓦を実見したところ、比較的残存状況が良好であり、範傷や調整痕などを良好に観察することができた。このような良好な資料であるにもかかわらず、現状では同資料の実測図や拓本は公開されていない。そこで今回、実測および写真撮影を行い、資料紹介することとした。

九頭神廃寺の軒丸瓦は、枚方市教育委員会刊行の『枚方市文化財調査報告第三二集 九頭神遺跡—九頭神廃寺—』<sup>1)</sup>(以下、97年報告書とする)をはじめとする発掘調査報告書によって、その種類や内容が公表されている。また、九頭神廃寺の軒丸瓦は先学による検討がなされており、様々な指摘がなされている。小稿ではこれらの現状をふまえ、資料紹介をしたのち、九頭神廃寺出土瓦と関西大学博物館所蔵資料との比較を行い、九頭神廃寺の瓦について若干の検討を試みたい。

### 二. 九頭神廃寺について

#### 1. 九頭神廃寺の概要

関西大学博物館所蔵九頭神廃寺出土軒丸瓦の資料紹介をするにあたり、九頭神廃寺と九頭神廃寺出土軒丸瓦に関する先行研究について整理したい。まずは、九頭神廃寺の概要をまとめる。

九頭神廃寺は大阪府枚方市牧野本町に位置する、飛鳥時代後期に造営されたとみられる古代寺院跡である。今日までに200次を超える発掘調査が行われており、塔基壇、寺域の東・西・北限とみられる溝、官衙風配置をとる掘立柱建物群、総柱式の掘立柱建物、塔下層の掘立柱回廊とそれに付随する掘立柱建物などが検出されている。

九頭神廃寺は既往の調査成果から、やや検討の余地はあるものの、一町半四方程度の寺域を有していたと考えられている。その伽藍配置は金堂や講堂が検出されていないため明らかでないが、調査状況から法起寺式伽藍配置であったと想定されている<sup>2)</sup>。また、8世紀第2四半期頃に伽藍地周辺の整備が行われたとみられており、この頃に整備されたとみられる付属院地の存在も確認

されている。

寺院地北西域で確認された付属院地は、築地によって二つに区画されている。このうちの一方の付属院地からは、蔵とみられる総柱掘立柱建物が5棟以上検出された。この付属院地は倉垣院に相当するとみられている。もう一方の付属院地では、大型掘立柱建物とその北側に広がる空間地が検出されており、政所院に相当すると考えられている。以上の様相から、奈良時代の九頭神麿寺は、機能分化した付属院地をもつ寺院であったと考えられている<sup>3)</sup>。

九頭神麿寺の下層からは大型掘立柱建物と掘立柱回廊状遺構が検出された。この掘立柱回廊状遺構は塔基壇に重複して検出されており、九頭神麿寺造営以前の建物であることは疑いない。九頭神麿寺が位置する場所には、その造営以前に前身寺院か豪族居館が存在したと考えられている。なお、前身建物の年代は7世紀中頃とみられている<sup>4)</sup>。

では、九頭神麿寺の造営氏族は誰なのだろうか。九頭神麿寺の造営氏族についてはすでに多くの考察がなされているが、近年に限れば、上田陸氏、小笠原好彦氏、竹原伸仁氏による論考が挙げられる。上田氏は、九頭神麿寺の所在地を『倭名類聚抄』にみる交野郡岡本郷とし、岡本郷に関わる氏族が造営氏族と考えた。その候補としては、のちに岡本忌寸に改名した、中国系渡来氏族である台忌寸を挙げている<sup>5)</sup>。小笠原氏は、樟葉宮造営に河内馬飼首荒籠が関わっていることから、荒籠が交野郡を本拠地としていたとし、河内馬飼造を造営氏族と判断した<sup>6)</sup>。竹原氏は、寺院造営は一氏族のみが果しえたものではないとし、複数の氏族がその造営に関与したとする。そして、山背との関係を重視する立場から、その壇越の一部に秦氏が含まれると想定した<sup>7)</sup>。

以上のように、九頭神麿寺は奈良時代や造営以前の様相については比較的明らかになっているが、造営当初の様相については不明な部分が残されているのが現状である。今後の発掘調査の成果や、調査成果をふまえた研究の促進による、さらなる実態解明が求められるところである。

## 2. 九頭神麿寺出土瓦に関する先行研究

次に、主に九頭神麿寺出土瓦に関する研究史をまとめる。

九頭神麿寺出土瓦の研究は、管見の限り、藤澤一夫氏の論考を嚆矢とする。藤澤氏は後述する竹原伸仁氏の分類でいうKZM22と同範の瓦を取り上げ、複弁系紋類海会寺式並式和泉寺式(紀寺式)に分類している。この分類に当てはまる瓦は南河内と北河内に分布することを指摘し、北河内の遺跡群に関しては、隣接する山背との関係を想定している。また、この分類に当てはまる瓦の祖型は新羅に求められるとしている<sup>8)</sup>。

九頭神麿寺出土瓦が総合的に言及されるようになるのは、97年報告書の刊行以降である。竹原氏は97年報告書で九頭神麿寺出土瓦を、軒丸瓦十型式十二種、軒平瓦十型式十一種に分類した(図1)。分類した型式は、九頭神遺跡の略称であるKZに軒丸瓦であればMを、軒平瓦であればHを付し、後に二桁の数字をつけることで表現している。なお、この分類は後に狩野美那子氏によって軒丸瓦一型式が追加されており、現在確認されている九頭神麿寺出土瓦は、軒丸瓦十一型式十三種、軒平瓦十型式十一種となっている<sup>9)</sup>。

97年報告書にて竹原氏は、九頭神麿寺出土軒瓦について検討を加えている。この際、特にKZM21・KZM22と、「紀寺式」軒丸瓦<sup>10)</sup>との関係について言及している。この検討の中で竹原氏は、文様構成や製作技法の差異などからKZM21・KZM22を「紀寺式」軒丸瓦とみることに疑念

を呈し、再考の必要性を主張している。また、製作技法と製作工人の系譜から、小山廃寺よりもむしろ山背地域との関係があることを指摘している<sup>11)</sup>。

97年報告書の刊行後、九頭神廃寺出土瓦について言及した論考には、亀田修一氏と小笠原好彦氏のものがある。亀田氏は、九頭神廃寺出土素弁八弁蓮華文軒丸瓦は高句麗系にあたるとし、高句麗系の瓦が枚方市北部から八幡市にかけて多くみられることを指摘した。また、九頭神廃寺の瓦は高句麗系もしくは高句麗の影響をうけた古新羅系と新羅系の瓦に分類できるとしている。KZM22については、「紀寺式」軒丸瓦の祖型になる可能性を想定する。また、その類例が統一新羅にみられることを指摘し、今後高句麗か新羅でKZM22の祖型となる瓦が出土する可能性を想定したうえで、朝鮮半島の影響を受けて「紀寺式」軒丸瓦が成立したとみている。なお、KZM22とKZM21の関係については、KZM22を祖型としてKZM21が成立したとする<sup>12)</sup>。

また、小笠原氏はKZM21が「紀寺式」軒丸瓦よりも文様的に古相を示すとし、「紀寺式」軒丸瓦の祖型とした。また、KZM21からKZM22の変化は想定できないとし、KZM22からKZM21を経て、小山廃寺出土「紀寺式」軒丸瓦の順に型式変化したと想定している<sup>13)</sup>。

亀田氏と小笠原氏の論考を受け、竹原氏は再度九頭神廃寺出土軒丸瓦の検討を行っている。ここでも竹原氏は、九頭神廃寺周辺に大和に直結する瓦がみられないことなどを指摘し、九頭神廃寺出土軒丸瓦が「紀寺式」軒丸瓦の祖型になる可能性を否定している。この検討は二回にわけて発表されており、それぞれについて以下にまとめる。

一回目の検討は、古代瓦研究会において発表されている。このとき竹原氏は、KZM21は「紀寺式」軒丸瓦に比較的忠実とする一方で、KZM22は雷文部の表現や中房径、連子配置が大きく異なることを指摘した。また、調査上の所見として、KZM22所用建物である塔基壇が7世紀第4四半期以降に造営されたことが確認できているため、KZM22の年代も小山廃寺造営年代より遅れるとみるべきとした。これらの所見から、KZM21とKZM22は「紀寺式」軒丸瓦の祖型に当たらないとした。なお、この検討が発表された古代瓦研究会の討議において、山崎信二氏は九頭神廃寺出

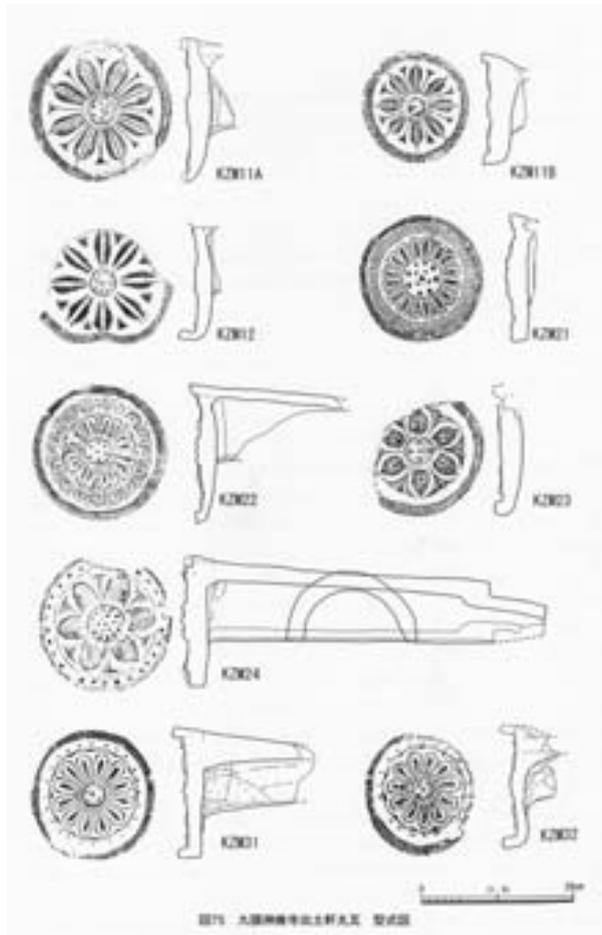


図1 九頭神廃寺出土軒丸瓦一覧

土瓦が小山廃寺出土瓦よりも遡るとみることは難しいものの、ほぼ同時期になる可能性は否定できないのではないか、との見解を示している<sup>14)</sup>。

古代瓦研究会の後に発表された論文では、九頭神廃寺から小山廃寺の流れも、KZM22からKZM21へと型式変化したとみる見解も、型式学的に矛盾があると指摘した。同様に、製作技法の観点から、KZM21とKZM22とでは製作工人が異なるとし、瓦当文様の違いのみを根拠に年代差や前後関係を検討することへの疑問を呈した。また、九頭神廃寺の造営は7世紀末葉～8世紀初頭を遡りえず、小山廃寺造営年代の一定点である天武5年以降の造営であると改めて主張した<sup>15)</sup>。

以上のように、九頭神廃寺出土軒丸瓦はこれまでに多くの研究者による様々な検討がなされてきた。ただし、主な争点であるKZM22と「紀寺式」軒丸瓦との関係については、結論が出ていないのが現状である。

### 三. 資料紹介

本章では、関西大学博物館所蔵の九頭神廃寺軒丸瓦2点を資料紹介する。資料の提示にあたり、それぞれに瓦1、瓦2の番号を付し、本文中と図中の番号とを対応させている。この番号は便宜上任意に設定したものであり、実際の資料にこの番号が記されているわけではないことをお断りしたい。

#### 1. 瓦1の紹介

瓦1は単弁八弁蓮華文軒丸瓦である。瓦当径は復元でおよそ18.2cmを測る。瓦当左側三分の一程度が破損しており、丸瓦部は現存しない。

まず、瓦当表面の観察所見を述べる。花卉は花卉中央が窪む平面口唇状である。花卉の先端は細くとがり、その先端はやや外側に開きながら外縁部分にまで達する。間弁は形骸化した楔形を呈し、中房には接しない。凸形の中房には蓮子が1+8に配される。蓮子の間隔は一定しない。範傷は蓮子周辺で顕著に確認でき、花卉中央部の窪み内でも一か所確認できる。また、その他の特徴として、外縁部の内側側面に、シワ状の筋が入る様子が確認できる。

次に瓦当部裏面の観察所見を述べる。瓦当裏面にはユビオサエがみられ、それを消すように板状工具によるナデが施される。ユビオサエは全体的に観察できるが、丸瓦との接合部周辺で顕著にみられる。ヘラナデは瓦当下端部へ向けておおよそ斜めになされるものと、瓦当に沿って円弧状になされるものが確認できる。断面の形状は裏面中心が膨らむ、緩やかな弧状を呈する。

瓦当部と筒部の接合は瓦当裏面上端で行われる。瓦当と筒部の接合方法は、瓦当裏面上端を切り取って段をつくり、そこに筒部先端を差し込んで行われている(図8)。補強粘土の量は少なく、丸瓦部凹面側には瓦当との接合部に沿うように板状工具による円弧状のナデが施されている。なお、板状工具によるナデは瓦当側面にもみられ、瓦当を一周するように施されている。

以上の観察所見から判断して、瓦1は九頭神廃寺出土軒丸瓦のKZM12に該当すると判断できる。

#### 2. 瓦2の紹介

瓦2は複弁蓮華文軒丸瓦である。瓦当径はおよそ18.5cmを測る。素文の立ち上がりと外区の

一部が破損するが、比較的残りは良好である。丸瓦部はほとんど現存しない。

内区の複弁八弁蓮華文は花卉中央が膨らみ、やや立体的に表現されている。子葉の大きさは各部で異なる。間弁は花卉の間だけでなく、花卉の上端にも配される。花卉の間に配される間弁は楔形を呈し、その先端が中房にまで達するものと達しないものがある。花卉上端に配される間弁も楔形を呈し、いずれも花卉に接しない。中房は凸形で、蓮子は1+6に配される。蓮子の間隔は比較的一定している。

外区内縁には、雷文もしくは花卉文と呼ばれる文様が配される。文様の一単位は、立体的に表現された剣頭状の文様が三重になったものである。それぞれの剣頭状の文様の間には、間弁もしくは蕊状の表現がみられ、重弁蓮華文の表現に似る。その配置は、内区の複弁蓮華文に表された間弁の位置に対応しており、精密な文様の割り付けをみてとれる。

外区外縁は素文で直立する高縁である。外縁の幅にバラつきがみられることから、使用された範は側面がない範Bであったとみられる。外縁外区の内側側面には、範に粘土を詰める際に生じたとみられるシワ状の痕跡が観察できる。

次に瓦当部裏面の観察所見を述べる。瓦当裏面にはユビオサエがみられ、それを消すように板状工具によるナデが施される。ユビオサエは瓦当裏面全面に観察できるが、特に丸瓦と瓦当の接合部付近に顕著にみられる。板状工具によるナデは、丸瓦接合部付近から瓦当下端部へ向けて斜めに施されるものと、瓦当のラインに沿って円弧状に施されるものとが確認できる。瓦当裏面は中心部が緩やかに膨らみ、断面でみると半球状に近い形状を示す。

瓦当と筒部の接合は、瓦当裏面上端でなされている。接合方法は本資料からは判断できない。補強粘土の量は少なく、接合部の凹面側には円弧状のナデ、凸面側部分にもナデが施されている。瓦当裏面の調整も同様にナデが施される。

以上の観察所見から判断して、瓦2は九頭神麿寺出土軒丸瓦のKZM22に該当すると判断できる。

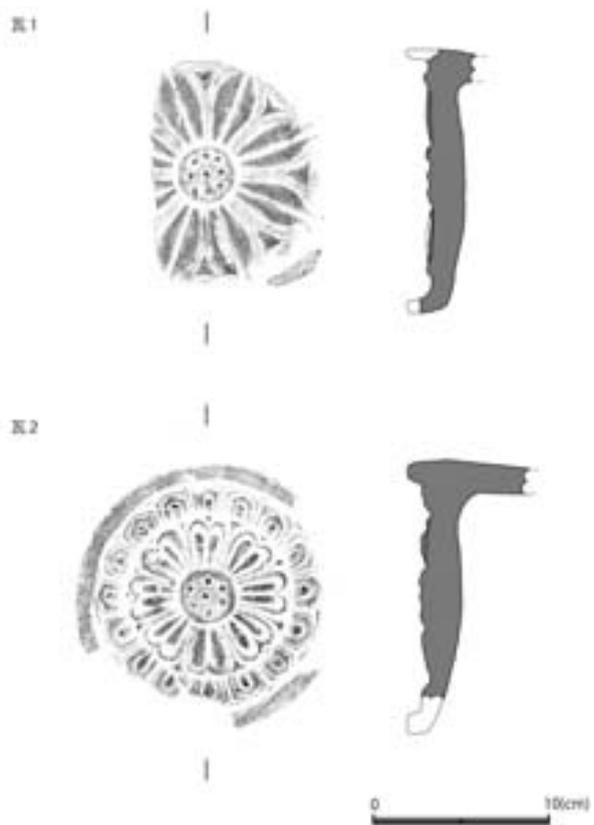


図2 関西大学博物館所蔵九頭神麿寺採集軒丸瓦

## 四. 同型式の軒丸瓦の胎土の異同

### 1. 検討の方法

ここまで瓦1と瓦2の観察所見を述べ、瓦1が九頭神麿寺出土軒丸瓦のKZM12に、瓦2が九頭神麿寺出土軒丸瓦のKZM22に該当することを確認した。小稿ではこれらの瓦を用い、九頭神麿寺に関わった製作工人に関して若干の検討を行いたい。

清野孝之氏によると、瓦は胎土が異なれば生産地が、製作技法が異なる場合は製作工人がそれぞれ異なるという<sup>16)</sup>。小稿ではこの清野氏の想定を作業仮説とし、関西大学博物館所蔵瓦と枚方市所蔵九頭神麿寺出土瓦の胎土比較を行う。この比較を通じて、九頭神麿寺から出土する同范軒丸瓦が常に同じ産地の粘土でつくられているのか、軒丸瓦の型式変化にともなって粘土の産地が変化しているのかを検討したい。

また、竹原氏はKZM22は製作技法によって二種類に細別できるとし、二種類の製作工人がその製作に携わったと指摘する。異なる製作工人が粘土を用意する場合、それぞれが異なる産地の粘土を用意する可能性は十分に考えられる。このため、製作工人の違いによって、製品の胎土が変わるという可能性も考える必要があるだろう。

胎土を検討するにあたり、小稿では顕微鏡写真を用いる。顕微鏡写真は、USB マイクロスコープ (Dino-Lite Pro 2 DILITE80・サンコー社製) を使用して撮影した<sup>17)</sup>。今回撮影した顕微鏡写真の倍率はおよそ50倍で統一し、顕微鏡写真を撮影する際には必ず複数地点で撮影している。

顕微鏡写真から胎土の異同を検討する際には、主に粒径の小さい鉱物の含有量を判断基準とした。胎土中に含まれる粒径の大きな鉱物は、水簸の程度によって含有率が大きく変動する可能性がある。しかし、粒径の小さな鉱物は水簸を行ったとしても胎土中に残る可能性が高いと思われる、判断基準として適切だと考えた。

まずは瓦1とKZM12の瓦との胎土比較、瓦2とKZM22の瓦との胎土比較を行い、同型式の軒丸瓦が同一の胎土で作られているのかどうかを検証したい。

### 2. 瓦1とKZM12の胎土比較

図3は瓦1とKZM12の顕微鏡写真である。まずは、それぞれの胎土の特徴をみていきたい。

図3-①(瓦1)の胎土は、素地に微細な黒色粒を多く含み、また、黒色粒と比べるとやや量は少ないが、微細な白色粒と無色透明粒を含んでいる。やや粒径の大きな鉱物に注目すると、無色透明粒が多く含まれ、わずかに白色粒が含まれている様子が確認できる。

図3-②(KZM12)の胎土は、素地に微細な黒色粒を多く含み、また、黒色粒と比べるとやや量は少ないが、微細な白色粒を含んでいる。極めて微量ではあるが、微細な無色透明粒も認められる。やや粒径の大きな鉱物に注目すると、白色粒が比較的多く含まれ、無色透明粒が少量含まれている様子が確認できる。

両者の胎土の特徴を比較すると、粒径のやや大きな鉱物の含有量に若干の差異がみられるものの、素地に含まれる微細な鉱物の特徴は近似しており、同じ胎土とみてよいと思われる。このことから今回の検討では、瓦1とKZM12の胎土は同じものであり、KZM12の製作時には同じ胎土

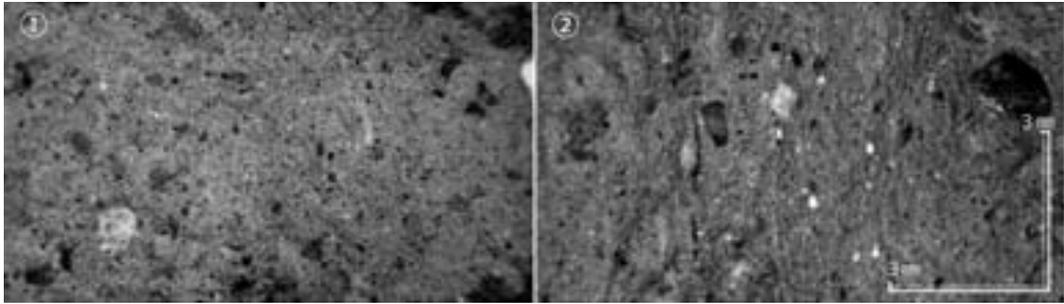


図3 瓦1とKZM12の胎土  
①瓦1 ②KZM12 (97年報告書 図10-6)

が使用されていたと判断したい。

### 3. 瓦2とKZM22の胎土比較

次に、瓦2とKZM22の胎土を比較する。なお、KZM22は二種類の製作技法が存在することが指摘されている。製作工人が複数想定できるのであれば、それぞれの製作工人が使用した粘土が異なる可能性も十分に考えられる。このため、KZM22ではKZM12よりも資料数を増やして比較検討を試みた。

図4-①(瓦②)の胎土は、素地に微細な黒色粒を多く含み、また、黒色粒と比べるとやや量は

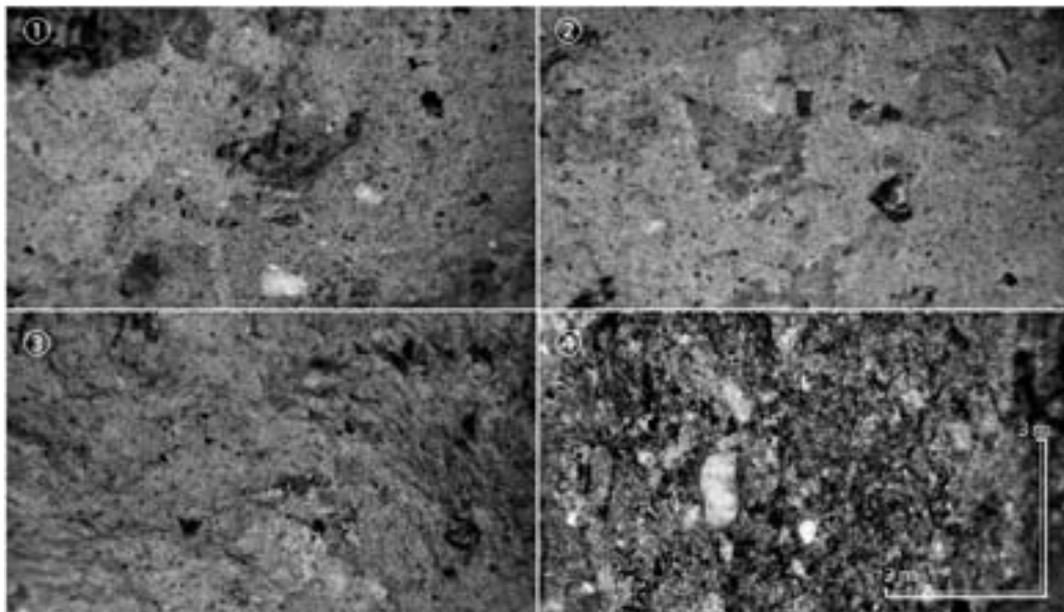


図4 瓦2とKZM22の胎土  
①瓦2 ②KZM22b (97年報告書 図10-6)  
③KZM22b (97年報告書 図13) ④KZM22a (97年報告書 図10-5)

少ないが、微細な白色粒を含んでいる。極めて微量ではあるが、微細な無色透明粒も認められる。やや粒径の大きな鉱物に注目すると、無色透明粒と白色粒が含まれている様子が確認できる。

図4-② (KZM22b) の胎土は、素地に微細な黒色粒を含み、また、黒色粒と比べると極めて量が少ないが、微細な白色粒を含んでいる。やや粒径の大きな鉱物に注目すると、無色透明粒と白色粒がわずかに含まれている様子が確認できる。

図4-③ (KZM22b) の胎土は、素地に微細な黒色粒を含み、また、黒色粒と比べると極めて量が少ないが、微細な白色粒を含んでいる。極めて少量だが、微細な無色透明粒も認められる。やや粒径の大きな鉱物に注目すると、無色透明粒が多く含まれ、わずかに白色粒が含まれている様子が確認できる。

図4-④ (KZM22a) の胎土は、素地に微細な白色粒を多く含み、また、無色透明粒も多く確認できる。同様に、白色粒と比べると量は非常に少ないが、微細な黒色粒も認められる。やや粒径の大きな鉱物に注目すると、白色粒と無色透明粒が多く含まれる様子を確認できる。

以上の観察所見から胎土を比較すると、KZM22は胎土の違いで2グループに分類できる可能性がある。図4-①～③は含まれる粒の割合に若干の差異がみられるものの含まれる鉱物は共通しており、同じ胎土であると判断できる。しかし、図4-④は胎土の特徴が他の図4-①～③と異なるため、異なる胎土が使用されていると判断できる。

#### 4. 同范軒丸瓦の胎土の異同

今回の検討では、KZM12の二点の軒丸瓦は、いずれも同じ胎土だと判断できた。このことから、KZM12はすべて特定の製作工人がつくった可能性が高いと思われる。

一方、KZM22の四点の瓦には二種類の胎土が認められた。これは、KZM22をつくった製作工人が複数いたとする竹原氏の指摘に、一致する可能性がある。ただし、検討した資料の数や焼成温度が胎土に及ぼす影響などを考慮していないため、現状では断言できない。

今後さらなる検討が必要だが、ここまでの九頭神麿寺出土同范軒丸瓦の胎土研究から、以下のことが考えられる。特定の古代寺院から出土した同一型式の軒丸瓦は、基本的に同じ製作工人がつくった可能性が高い。ただし、複数の製作工人が同型式の軒丸瓦の製作に携わる場合があり、その時には同一型式の軒丸瓦に異なる胎土の瓦が含まれる可能性がある。

### 五. 軒丸瓦同士、あるいは軒丸瓦以外との胎土比較

#### 1. 九頭神麿寺出土軒丸瓦の胎土比較

前章では九頭神麿寺出土軒丸瓦のうち、同一型式の軒丸瓦同士での胎土比較を行った。本章では異なる型式の軒丸瓦同士や、軒平瓦、塼仏との胎土の比較を行いたい。まずは、主な軒丸瓦同士の胎土をみていきたい。

図5-① (KZM11b) の胎土は、素地に微細な黒色粒を含み、また、黒色粒と比べると極めて量が少ないが、微細な白色粒・無色透明粒を含んでいる。やや粒径の大きな鉱物に注目すると、白色粒・無色透明粒が少量認められる。

図5-③ (KZM21) の胎土は、素地に微細な無色透明粒を多く含み、部分的に無色透明粒と同

量かやや少ない量の、微細な白色粒・黒色粒を含んでいる。やや粒径の大きな鉱物に注目すると、白色粒を多く含み、無色透明粒がやや少量認められる。

図5-⑥（KZM23a）の胎土は、素地に微細な黒色粒を多く含み、また、部分的に黒色粒よりも少ない量の、微細な白色粒・無色透明粒を含んでいる。やや粒径の大きな鉱物に注目すると、白

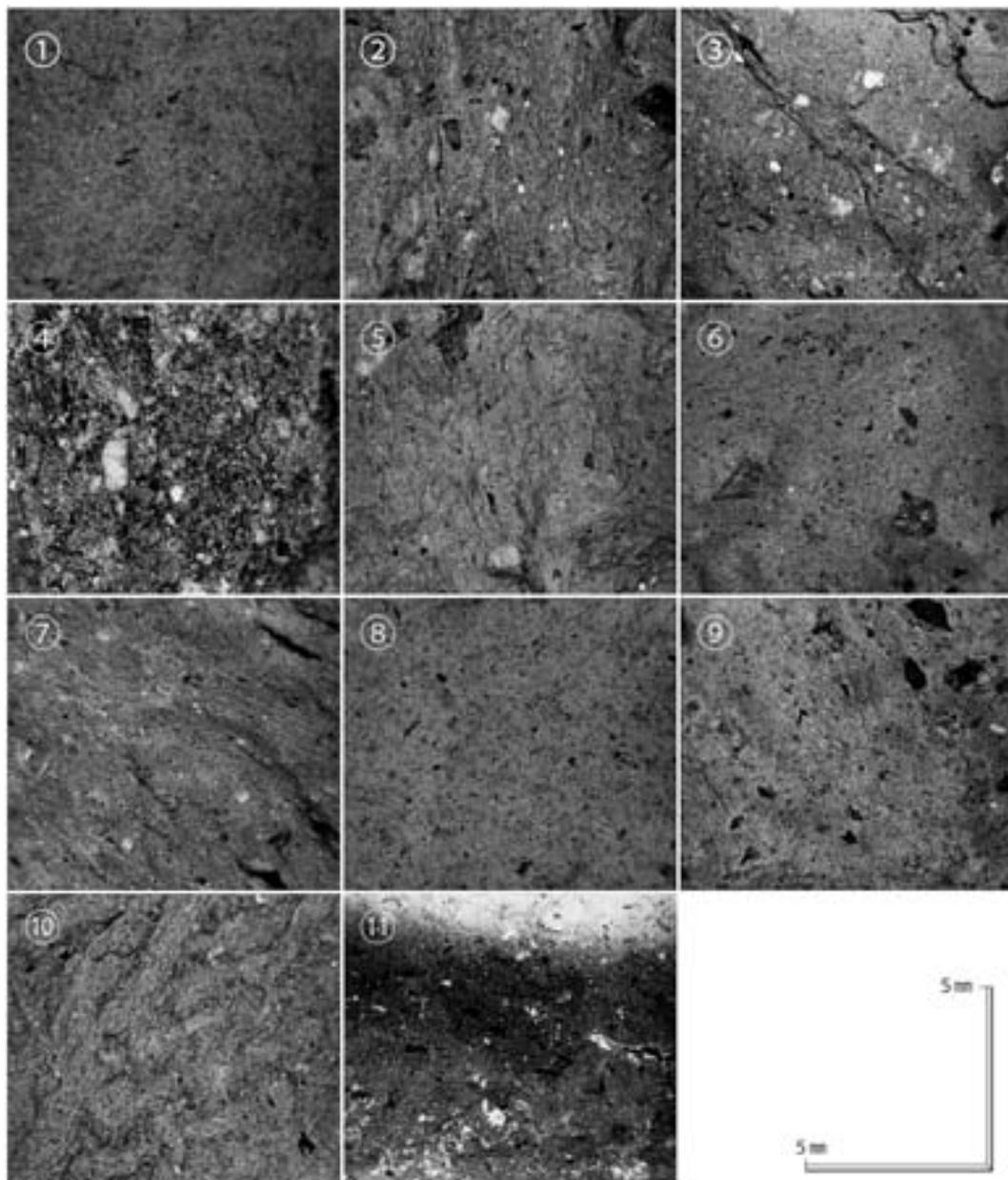


図5 九頭神麿寺の胎土

- ①KZM11b ②KZM12 ③KZM21 ④・⑤KZM22 ⑥KZM23a  
 ⑦KZM23b ⑧KZM24 ⑨KZM31 ⑩KZH22 ⑪方形三尊博仏

色粒、無色透明粒を含み、赤褐色や青灰色の鉱物がわずかに認められる。

図5-⑦（KZM23b）の胎土は、素地に微細な白色粒・無色透明粒を多く含み、また量は少ないが、微細な黒色粒を含んでいる。やや粒径の大きな鉱物に注目すると、白色粒を多く含み、無色透明粒と黒色粒がやや少量認められる。また、わずかではあるが褐色粒もみられる。

図5-⑧（KZM24）の胎土は、素地に微細な黒色粒を多く含み、また、黒色粒よりやや少ない量の、微細な白色粒・無色透明粒を含んでいる。やや粒径の大きな鉱物に注目すると、白色粒を多く含み、無色透明粒と黒色粒がやや少量認められる。

図5-⑨（KZM31）の胎土は、素地に微細な黒色粒を多く含み、また、黒色粒よりやや少ない量の、微細な白色粒・無色透明粒を含んでいる。やや粒径の大きな鉱物に注目すると、無色透明粒を多く含んでおり、白色粒、黒色粒が少量認められる。

以上の観察所見から判断すると、九頭神麿寺出土軒丸瓦には、素地に含まれる鉱物の主流が黒色粒のもの（KZM11b・KZM12・KZM22b・KZM23a・KZM24・KZM31）と、白色粒・無色透明粒のもの（KZM21・KZM22a・KZM23b）の、少なくとも二種類の胎土が認められる。黒色粒を多く含む胎土は、比較的長い期間使われていたようである。瓦がつくられた年代に時期差があったとしても、意図して同じ場所から粘土を採取していた可能性がある。一方で、白色粒を多く含む胎土は使用された時期が短く、対照的である。このことは胎土と製作工人の関係を考えるうえで、示唆的である。

## 2. 軒丸瓦と軒平瓦の関係-KZM22とKZH22の胎土比較

軒丸瓦とそれに組み合う軒平瓦の胎土の関係はどうだろうか。九頭神麿寺出土瓦で、組み合うことが確実なのはKZM22とKZH22である<sup>21)</sup>。この二者の胎土の関係について検討したい。

図5-⑩（KZH22）の胎土は、素地に微細な黒色粒を多く含み、また、黒色粒と比べると極めて量は少ないが、微細な白色粒・無色透明粒を含んでいる。やや粒径の大きな鉱物に注目すると、無色透明粒が含まれ、わずかに白色粒が含まれている様子が確認できる。

以上確認したKZH22の胎土の特徴は、図4で確認したKZM22bの胎土の特徴と近似しており、同一の胎土と判断できる。このことから、少なくともKZM22の一部とKZH22は同じ製作工人によってつくられたと考えられる。正確な評価をするためには、今後、データを累積していく必要があるが、確実に組み合う軒丸瓦と軒平瓦では、その製作に共通する製作工人が関与した場合はあるとみてよいだろう。

## 3. 瓦と埴仏の胎土比較

最後に、瓦と瓦以外の土製の遺物とを胎土で比較し、もう少し異なる視点から九頭神麿寺に関わった製作工人の様相をとらえたい。古代寺院からは瓦以外にも、土器をはじめとする様々な土製品が出土する。今回はその中でも特に古代寺院と結びつきが深い埴仏について、瓦と胎土を比較したい。

九頭神麿寺からは、1点の埴仏が出土している。その図像は、三重県名張市所在夏見麿寺などから出土している方形三尊埴仏と同原型資料である<sup>18)</sup>。清水昭博氏の分類でいう方形三尊Bに該当するとみられる。夏見麿寺出土方形三尊埴仏Bを比較すると、九頭神麿寺出土方形三尊埴仏B

は極めて小さく、およそ4割の大きさである<sup>19)</sup>。

さて、図5-⑪(九頭神麿寺出土埴仏)の胎土をみると、素地に微細な無色透明粒と白色粒を多く含み、黒色粒はほとんど確認できない。やや粒径の大きな鉱物に注目すると、無色透明粒が多く含まれる様子が確認できる。それ以外に赤色透明粒や白色粒が確認できるが、含有量は極めて少量である。

九頭神麿寺出土埴仏の胎土の特徴は、今回確認した軒丸瓦・軒平瓦とは一致しないものである。このことから、埴仏と瓦では、生産地や製作工人が異なる可能性が考えられる。あるいは埴仏は瓦よりも複雑な図像を明瞭に表現する必要があるため、水簸の度合いを変えたり他の精良な粘土を混ぜたりしている可能性が考えられる<sup>20)</sup>。

## 六. 胎土研究の成果と課題

以上、九頭神麿寺出土瓦について、関西大学博物館所蔵軒丸瓦を紹介するとともに、特に胎土に注目して検討を行ってきた。紹介資料の概要はすでに本文中で述べたので、胎土に関する検討についてまとめたい。

小稿では、同一時期に同一製作工人が瓦をつくったのであれば、胎土は同じものになるという作業仮説をたて、竹原氏が指摘する九頭神麿寺出土瓦の製作工人の系統差について検討を試みた。胎土を検討する際には、USB マイクロスコープを用いて顕微鏡写真を撮影し、実見と顕微鏡写真によって胎土比較を行った。

同一型式の軒丸瓦の胎土比較では、同一型式の瓦には基本的に共通の胎土が用いられた可能性が高いことを指摘した。ただし、製作工人の違いなどが認められる場合には、胎土が異なる可能性がある。

九頭神麿寺出土軒丸瓦全般の胎土比較では、少なくとも二種類の胎土が確認できた。一方の胎土は長期間にわたって認められるのに対し、もう一方の胎土は短い期間にしか用いられなかった可能性がある。胎土と製作工人の関係について、今後とも検討を続けていく必要がある。

軒丸瓦と軒平瓦との胎土比較では、少なくともKZM22とKZH22については胎土が近似することを確認した。組み合う軒丸瓦と軒平瓦は、同じ胎土でつくられている可能性があることを確認した。

瓦と埴仏の胎土比較では、胎土からは明確な関係はとらえられなかった。両者の胎土は異なるものであり、胎土の使い分けがなされていたか、製作工人が異なるかのいずれかの可能性が考えられる。

以上のように様々な観点から胎土を比較したところ、九頭神麿寺出土土製品には異なる胎土でつくられたものが含まれていることが分かった。この胎土の違いは製作工人の違いに起因する可能性がある。

ただし、今回の検討についてはいくつかの課題も残った。まず、小稿で分析を行った資料数の少なさである。小稿では、関西大学博物館所蔵資料と枚方市所蔵資料の比較から、同一型式内の胎土の異同を検討したが、このわずかな資料だけで全体を把握しようとするのはあまりに無謀であろう。今後、さらなる調査を実施し、小稿が作業仮説とした胎土の前提を検証する必要がある。

る。また、USB マイクロスコープを用いた胎土研究方法の確立、および胎土の異同に関する評価方法の確立が必要である。これらについては、今後の課題としたい。

小稿は、平成二十四年度笹川研究助成の助成研究「セン仏の製作主体に関する考古学的研究～特に胎土から探るその実態～」(研究番号：24-116)の一部成果を含みます。また、小稿作成にあたり、資料紹介を快諾いただいた関西大学博物館山口卓也氏をはじめ、下記の方々にお世話になりました。末筆ではありますが、記して御礼申し上げます。(敬称略・五十音順)

近藤康司、竹原伸仁、枚方市教育委員会、名張市教育委員会

## 註

- 1) 枚方市教育委員会1997『枚方市文化財調査報告第32集 九頭神遺跡―九頭神廃寺―』
- 2) 西田敏秀2012「九頭神廃寺とその周辺」『交野ヶ原の古代寺院』枚方市教育委員会・枚方市文化財研究調査会
- 3) 菱田哲朗2010「古代寺院の寺務施設について」財団法人枚方市文化財研究調査会『九頭神遺跡Ⅲ―大阪府営枚方牧野住宅(建て替え)道路整備工事に伴う九頭神遺跡第206次調査概要報告書―』
- 4) 註①と同じ
- 5) 上田陸1999「高句麗系軒瓦と渡来系氏族」『瓦衣千年』森郁夫先生還暦記念論文集刊行会
- 6) 小笠原好彦2005「九頭神廃寺の造営氏族」『日本古代寺院造営氏族の研究』東京堂出版
- 7) 竹原伸仁1997「北河内地域における古代寺院の諸様相―飛鳥時代後期創建寺院を巡って―」『堅田直先生古希記念論文集』真陽社
- 8) 藤沢一夫1941「摂河泉出土古瓦の研究―編年の様式分類の一試企―」『仏教考古学論叢』東京考古学会
- 9) 財団法人枚方市文化財研究調査会2010『九頭神遺跡Ⅲ―大阪府営枚方牧野住宅(建て替え)道路整備工事に伴う九頭神遺跡第206次調査概要報告書―』
- 10) 今日、小山廃寺は紀寺ではないとみる見解が一般的であり、小山廃寺出土軒丸瓦を指標とする雷文縁複弁蓮華文軒丸瓦の一群を紀寺式と呼ぶことには問題がある。しかし、これに代わる名称が現状ではないため、小稿では便宜上「紀寺式」軒丸瓦と呼称する。
- 11) 註①と同じ
- 12) 亀田修一1998「朝鮮半島からみた枚方の寺院造営と瓦生産」森浩一上田正昭編『枚方歴史フォーラム継体大王と渡来人』大巧社、亀田修一2006『日韓古代瓦の研究』吉川弘文館
- 13) 註⑤と同じ
- 14) 竹原伸仁・近藤康司・上田陸2006「摂河泉の雷文縁・重圈文縁の複弁蓮華文軒丸瓦」奈良文化財研究所『第九回古代瓦研究会シンポジウム 飛鳥白鳳の瓦づくりⅨ』
- 15) 竹原伸仁2007「河内・九頭神廃寺再考―伽藍と瓦と―」『考古学論究―小笠原好彦先生退任記念論集―』真陽社
- 16) 清野孝之2005「何が動いたのか―唐招提寺金堂創建軒瓦および同範瓦の再検討―」『待兼山考古学論

集一都出比呂志先生退任記念一』

- 17) USB マイクロスコープを用いた検討方法やその精度については、すでに発表したことがある。(中東洋行2013「胎土から探るセン仏製作の様相」関西学生考古学研究会第35回例会)
- 18) 大脇潔1986「埴仏と押出仏の同原型資料—夏見廃寺の埴仏を中心として—」『MUSEUM』418巻1月号
- 19) 筆者が計測し、算出した。比較計測した部位は、向かって右上に配される飛天の右足から左足までの幅とした。
- 20) 民俗事例で、土器を製作する際に粘土を混ぜる場合があることが指摘されている。大阪大谷大学博物館2012『東南アジアの伝統的土器づくり—事例集』

#### 《図版の出典》

図1：財団法人枚方市文化財研究調査会2010『九頭神遺跡Ⅲ—大阪府宮枚方牧野住宅（建て替え）道路整備工事に伴う九頭神遺跡第206次調査概要報告書—』より

図2：筆者作成

図3～9：筆者撮影ならびに筆者作成



図6 瓦1の写真



図7 瓦2の写真

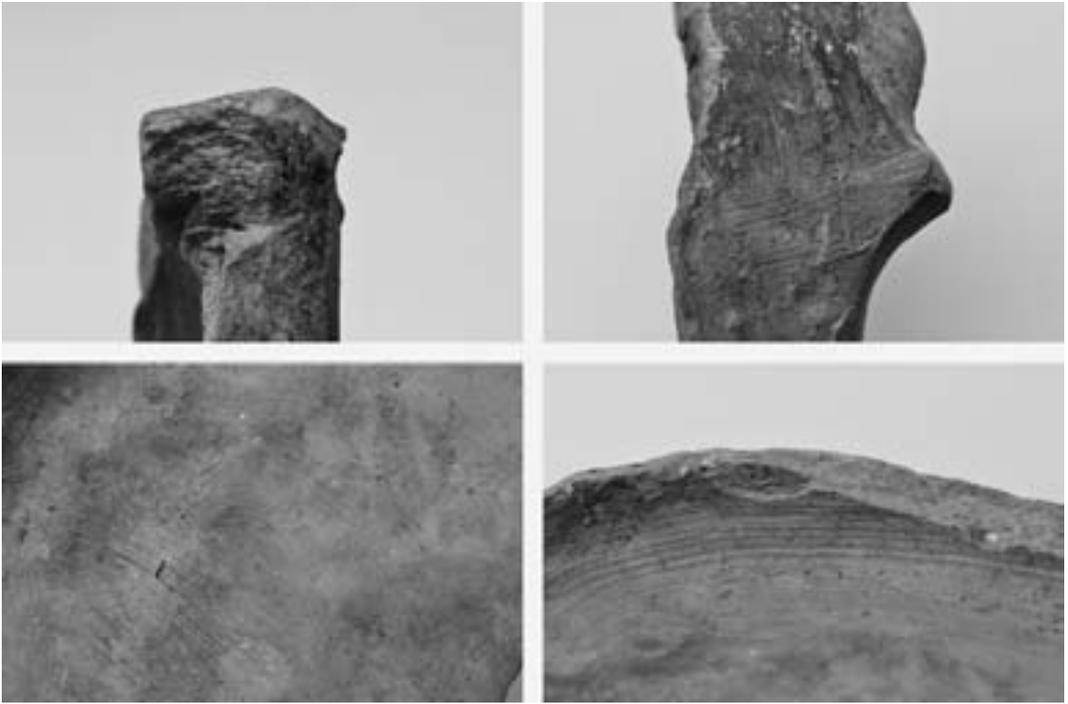


図8 瓦1の部分拡大写真



図9 瓦2の部分拡大写真